

いく様子を見ていた人たちが道内各地から訪れ、人口わずか330人の美流渡地区に、2週間で約1000人の来場者があった。

「絵には人の気持ちが集まってくる」
賑わいを見てMAYAさんは、そう語った。その言葉通り、展覧会の準備期間中から、多くの人がボランティアとして惜しみないサポートしてくれた。そして校舎の窓板に描いた絵がきっかけとなって、翌年4月から地域を走ることになった「東部丘陵線コミュニティバス」にもMAYAさんが絵を描いた。

2022年も校舎の試験活用は継続。5月、7月、9月と年3回の「みる・とーぶ展」と「みんなとMAYAMA X X展」を行うこととした。5月の「みる・とーぶ展」の出店者は昨年の2.5倍の25組。つくり手の作品販売だけでなく、地域の飲食店も参加。また、体育館では子どもが主体的に遊べる「ミルトぼうけん遊び場」を設置。

展覧会初日には、ポニーが引く子ども馬車が走ったり、最終日には太鼓の演奏があったりなどイベントも盛りだくさんだった。「山あいの地域で、自分のやりたいことをのびのびと行っている人たちがいることを知って元気をもらった」「校舎を活用してもらって、卒業生としてうれしい」などの声が上がった。

その後、7月と9月にも展覧会を開催。作品展示とともに、アンデス民族音楽のバンドや、ギニア出身のアフリカ太鼓の名人など、国際色豊かなライブも実施した。これらは実行委員会から参加を要請したのではなく、校舎での活動を知った人々が「ここで何かやりたい」と声をかけてくれたことで実現した。ここでも「絵には人の気持ちが集まってくる」という現象が起きていることを実感。年3回の展



暑い日も、雨の日も、MAYA MAXX は校舎の外で絵を描き続けた

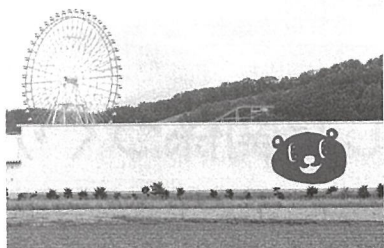
北海道岩見沢市の山あいは東部丘陵地域と呼ばれ、朝日、美流渡、毛陽、万字など様々なエリアがある。以前は産炭地として活況を呈したが、閉山後、急速に過疎化を遂げた。

商店も数えるほどしかない地域に、この5、6年、個性的な移住者が集まるようになり、そうした仲間と2016年に地域PR団体「みる・とーぶ」を立ち上げた。東部丘陵地域の「東部」と「美流渡」を掛け合わせ、こう名付けた。活動の中心は展覧会。移住者の中には、陶芸、木工、フラワーアレンジなど、ものづくりをする人々が多く、それらの作品を集めた展示を札幌や東京などで開催してきた。活動が拡大したきっかけは、近隣の美流渡小・中学校が閉校（2019年3月）したこと。校舎の利活用について、独

まちむら発見①

絵には人の気持ちが集まってくる

北海道岩見沢市 みる・とーぶプロジェクト実行委員会



写真右) 校舎の窓の絵がきっかけとなってコミュニティバスにも描くことに

写真中) 校舎の清掃は市民の手で。呼びかけに応えてくれた人々

写真左) 地域の様々な場所に絵を設置。食品加工メーカーの巨大な倉庫にクマの絵を描いた

自に勉強会を開催してきたことなどにより、2021年、旧美流渡中学校の試験活用を市からの要請により行うこととなった。

まず、私たちは、校舎の1階の窓に打ち付けられた雪止めの板に絵を描く活動を行った。窓板は、屋根の雪が落ちてガラスが割れないための対策ではあったが、近隣の住民からは「校舎が閉鎖されてしまっているようで寂しい」という声が上がっていた。一昨年に、美流渡に移住した画家であり絵本作家のMAYA MAXX (マヤ・マックス)さんは、こうした声に応えて、「板に絵を描いてはどうか?」と提案。「みる・とーぶ」はMAYAさんとともに、「窓板ペインティング」プロジェクトを開始した。市民とともに北海道教育大学岩見沢校の学生も参加。8月初旬の猛暑の中で制作が始まった。

一部が傷んでいた板に白いペンキを何層も重ねてベースをつくり、そこにMAYAさんが輪郭線を描いた。輪郭線に合わせて学生や市民が協力して色を塗った。窓板は全部で45枚以上あり、一辺が5メートル以上のものも。2週間ほどで約半分が仕上がった。また、中学校のメインとなる窓板は、MAYAさんが一人で制作。雨の日も風の日も絵を描く姿があった。

日に日に絵ができていく中で、地域のムードが変わっていった。活動日でもなくても窓板に白いペンキを塗ったり、草刈りをしたりと、自発的に動く人々が増えていった。

そしてこの年の10月、校舎全体を使って、地域のつくり手の作品を集めた「みる・とーぶ展」と美流渡に移住してから描いた新作を飾る「みんなとMAYAMA X X展」を同時開催。MAYAさんの展覧会は北海道教育大学岩見沢校と共催で行われた。SNSなどで校舎に絵が描かれて

覧会は合計40日間開催され、4300人が足を運んだ。

校舎での活動が始まる以前、「みる・とーぶ」は地域の外に出て発表をしてきた。しかし、この2年、地元で開催した方が集客につながることがわかった。多くのファンを持つMAYAさんが活動に加わったことも大きかった。

来場者は、ゆったりと時間を過ごしていて、東部丘陵地域の自然に触れ、つくり手たちから直接話を聞くことに価値を見出しているようだ。そして何より、参加した地域のつくり手が販売に手応えを感じていて、回を重ねることに商品ラインナップを工夫したり、作品のクオリティをあげたりと、日に日に成長しているところが重要な点だ。

MAYAさんが校舎から始めた絵を描く活動も広がりをみせている。東部丘陵地域にあるカフェやカレー屋などの看板やシャッターに次々と絵を描いている。この活動は、制作によってお金を得ようという気持ちはなく、ここに絵があったら、お店の場所がわかりやすいとか、地域に絵がある様子を見てみたいという衝動から行っている。

あるときMAYAさんは、「自分の絵は、みなさんへの贈り物だった」と気づいたそう。自分の主張を語るために絵を描くのではなく、みんながかわいいと思ったり、癒されたりするものを描きたいのだという。描かれた動物たちは、いつも目をキラキラとさせ、まるで空から希望がやってきたかのような表情を見せている。ピュアな心で描かれた絵だからこそ、地域の人々を本当に笑顔にさせるパワーがあるのだと思う。

地域に絵が増えるごとに、まちに明るさが増してくる。その明るさを感じたいと、人々が集まってくる。過疎地におけるアートの力を日々実感している。

(みる・とーぶプロジェクト実行委員会委員長 来嶋路子)